

國學院大學学術情報リポジトリ

民俗資料展示における「解説」とその意義

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三代, 綾, Mishiro, Aya メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000966

民俗資料展示における「解説」とその意義

三代 綾

要旨

近年、博物館の民俗資料展示に大きな変化がみられる。博学連携（博物館と学校）や、博福連携（博物館と福祉施設）についての昔の道具の展示である。前者の連携では見学時間や授業の意図が限られているため、後者の連携では資料を用いた経験のある人々の自由な反応を重視するために、「解説」を削る事も少なくない。ここで指すところの「解説」は、第一に題箋や解説パネル等による物的解説、第二に解説員等による人的解説に分けられる。本稿では、物的解説の中でも文字情報がみられる題箋及び解説パネルを軸として、博物館展示において、文字による「解説」がどのように捉えられてきたかに触れ、民俗資料展示における問題点及びその「解説」の意義について再検討する。

日本国内において紹介されたコールマンの説明札の論に始まり、時代を追って、特に文字による「解説」は良くも悪くも重要な役割を果たしている。民俗資料展示は、今を生きる人々にとって身近な道具（であった）モノを扱う他分野にない不安定な要素を持っており、「民具研究」の展示批評においては、博物館教育に必要とされる「解説」が今日も議論的になっている。したがって民俗資料展示における「解説」の意義は、コールマンや棚橋の論などからも判明するように、博物館教育として理解するためなのである。民俗資料展示では題箋（説明札）を付すことによる博物館教育的意義を示したとしても、それをすり抜けて自身の経験に当てはめやすいため、文字による「解説」をより工夫しなければならないのである。

【キーワード】 博物館展示 解説 文字 民俗資料展示 展示批評

はじめに

近年、民俗資料展示に大きな変化がみられる。博学連携（博物館と学校）や、博福連携（博物館と福祉施設）で用いる昔の道具の展示である。前者の連携では見学時間や授業の意図が限られているため、後者の連携では資料を用いた経験のある人々の自由な反応を重視するために、「解説」を削ることも少なくない。

ここで指すところの「解説」は、大別して二種が挙げられる。すなわち、第一に題箋や解説パネル等による物的解説、第二に解説員などによる人的解説である。前者を重視するあまり、狭い空間に詰め込んだ多くの情報で圧倒させ、展示意図がうまく伝わらない展示もみられる。一方、後者を重視するあまり、展示観覧の際に人的解説を介さなければよく理解できない展示の存在も看過できない。

本稿では、物的解説の中でも文字情報がみられる題箋及び解説パネルを軸として、博物館展示において文字による「解説」がどのように捉えられてきたかに触れ、民俗資料展示における問題点及びその「解説」の意義について再検討する。なお、民具展示と民俗展示は、前者がモノ、後者がモノを媒介としてその背景を叙述する展示と定義づけられるが、本稿ではどちらも含んだ意味として民俗資料展示という言葉を用いる。その理由としては、民具展示と民俗展示は異なるはずであるが、現時点において用語や博物館現場における混同がみられるためである。

一 博物館展示における解説論

1 コールマンによる説明札と「解説」

博物館展示の最初の「解説」は、人的解説である。家のコレクションをみせることに始まり、一般公衆を観覧者の対象としたのちは、より簡便に分かりやすくするために説明札が付された。説明札とは現在の題箋であり、資料名称や時代、所蔵者など最低限の情報を載せたものである。

昭和四年（一九二九）、博物館協会調査部の一記者による「博物館説明札に関する諸問題」が発表された。これは、昭和二年にコールマンが論じた『Manual for small museum』⁽¹⁾の一部を紹介したものであり、日本国内で博物館展示における「解説」の問題を提起した最初の記事であると考えられる。これによると、説明札は以下の意義を以て付けられている⁽²⁾。

博物館の説明札は陳列品を説明する為めのもので、教育的意義ある陳列品に對しては教育の方法として無くてはならぬものである。歴史的及び科學的陳列品には説明札を附することが大切だと云ふことは普ねく認容され、其の大切なことに就て疑を挿む者の少かるべきことは何人にも豫想し得らるゝことであらう。

つまり、解説札は教育的意義のある展示資料に對して不可欠であり、その必要性について疑問を覚える人が少ないだろうことは予想できるとしている。また、この記事は美術作品展示を主軸に扱っており、美術分野において作品を観覧する点では説明札がない方がよいが、疑問にも対応すべく最低限の情報を説明札に付し、説明全文を別冊に載せることを提案している。しかし、説明札をあえて付さないという点については「……教育を目的とする美術品や歴史若しくは科學の陳列品には避けねばならぬ」⁽³⁾として、美術分野における作品展示を含め、博物館教育的

意義を持たせる場合には説明札は必須条件であり、かつ歴史分野にとっては必須であることがわかる。

また、説明札を「個別的説明札」と「総合的説明札」の二種に大別している。これは、資料一つ一つに名称のみのキャプションを付す「個別的説明札」と、それらを総合的に説明する「総合的説明札」のことである。『博物館研究』第二巻第五号では説明札に関する記事が多く、以降の号に關しても説明札の大きさや色、文字の大きさやフォント、配置などの細かい部分が論じられている。このことから、当時は展示資料よりも説明札を目立たせないよう、かつ資料の情報を説明札というツールを用いてどのように、どこまで伝えるかを重視しており、博物館展示における「解説」のツールとしての説明札の発展が望まれていたと考えられる。さらに、人的な解説も重要であるが、それは補助的な役割を担うものであることから、誰がいつ来てもある一定の情報を伝達することができるツールとして、応対状況により左右されることのない最低限の情報を説明札に託す意図も考えられるのである。

すなわち、日本国内にコールマンの論を紹介し、博物館における展示資料に博物館教育的意義を感じるには説明札が必須であるとしたが、逆説的にいえば説明札がない展示資料に博物館教育的意義を観覧者が感ずるには、より工夫が必要であることを示しているとも考えられよう。

2 文字による「解説」

昭和四年に発表されたコールマンの論の紹介ののち、「解説」に関する論は形式的な面のみが重視され、機能や意義に触れる論文はごくわずかしか発見することができなかった。すなわち、博物館展示における「解説」は、形式のセンスに傾き、何を伝えるのかよりも、どのようにして伝えるのが先行してきたと考えられる。

昭和二十五年（一九五〇）に棚橋源太郎は『博物館学綱要』の中で、説明札の重要性を項の一つに挙げ、以下のよ

うに論じている。⁽⁴⁾

殊に科學産業歴史等の博物館では、説明札がなければ陳列品が殆んど意義を為さず、博物館としての作用をも為さない。説明札は博物館にとつて非常に大事ではあるが、さうかと云つて餘り目立つのは禁物で、これを濫用して、廉賣デーの品物に附ける特價札のやうになるのも面白くない。

つまり棚橋によると、科學産業歴史など分野の博物館展示において、説明札は必須であるが、特價札のように濫用する点を面白くないとしている。また、棚橋は「藝術品は鑑賞する事が眼目で、歴史や産業や科學の参考品は理解する事が主眼であり、そこに區別があるのである」⁽⁵⁾とし、博物館側の展示意図及び資料への理解のために、説明札があるとしている。

時を経て昭和五十五年（一九八〇）、『博物館研究』において「博物館の解説」というテーマで特集が組まれた。当座談会は、題箋を含む解説全般を主軸に置き、多様な視点で論じられている。

中でも当時、文化財保護審議会委員である松下隆章はアメリカの事例を以下のように述べている。⁽⁶⁾

戦後アメリカへ行き驚いたのは、展示物に解説をつけないで小さなラベルに物の名前と大体の年代を書くだけで不親切ではないかといいましたところ、別にカタログを売っているではないか。ダブルことは必要ない。カタログが売れないじゃないかと。なるほどと思いましたね。

松下は、展示の中で物的解説を必要とする考えを示している。松下が紹介したアメリカの展示は、展示をより分かりやすく、詳しく「解説」するために、展示とセットでカタログを必須とする展示のあり方である。反面、カタログなしでは、展示がよく分からないものであることは明らかである。

一方、同年、大阪市立自然史博物館の館長であった千地万造は、「解説」の多様な手法の中で、文字による解説を重

要視することを主張した。千地によると、文字による「解説」は展示室内における解説パネルと印刷物とに分かれるとしている。前者を技術的な面だけでなく、「どのような観客に訴えかけるのかという点を明確にし、内容にたち入った吟味が必要である」とし、形式面のみの論が飛び交う中で、その意義を問うている。千地の論の場合、説明札（ラベル・題箋）は範疇にない。千地は解説パネルについて、以下のように述べている。⁽⁸⁾

できるだけ多くの人に理解してもらえるものでなくてはならない。だれにでもわかり、かつある程度の内容を盛り込むということは、本来、不可能な面があるが、いくらかの工夫によって、ある程度、わかりやすいものを作ることができるだろう。

千地は続けて、三点の例を挙げている。第一に、テーマ展示はその意図を小学生にも読み取れるようなものとする、第二に展示物の群を解説する場合は中学生及び高校生が分かるもの、第三に個々の展示資料には高校生以上を対象としたものとする、ことである。つまり千地は、展示のテーマの理解までが小学生の理解し得るものとし、その資料がどのようなものであるのか、資料群から何が分かるのかという点に関しては、対象年齢を上げている。この点は、博物館展示の中で、ビデオや解説員等の動的手法を取らず、かつコストを抑え、いつでも展示を観覧することで一定の情報が伝達できる点を重視した。千地の論では、理解度別の解説利用を図っているため、展示のターゲットを一つに絞る必要はなく、万民に開かれた展示であるといえよう。

千地の論はテーマ展示の理解を小学生レベルまで簡易にすることにより、何故この展示を行うのか、この展示の意味する点は何かという基本的な情報を共有の下地に置きつつ、成長して博物館を再訪した際には新たな発見があるという効果も考えられよう。

平成二十年（二〇〇八）、樋口政則は文字による「解説」について、歴史展示に限定して以下のように論じている。⁽⁹⁾

展示意図を実現するには、展示意図に沿った解説が必要となる。あるいは、展示意図の基盤となった歴史叙述そのものを述べることになるかもしれない。展示制作者の発するメッセージである。それは必ずしも言語情報とは限らないが、それを展示において伝達する場合、資料はもちろんのこと画像や模型だけでは不十分であって、言語による叙述が欠かせない。展示では、そのほとんどを文字化することになる。

樋口は「解説」における文字の必要性を提示しながらも、「過剰な解説は、『モノ』を提示する価値を減じかねない」とし、文字が解説を左右する重要な役割を果たしている事を示している。

以上、棚橋はコールマンの論に沿いながらも、日本の民俗資料展示の再現展示に雰囲気重視で配置された資料群によくみられる「特價札のやう」な説明札を問題視しているといえる。棚橋は科学産業歴史などの博物館展示において、説明札を必須とするとしながらも、一方で資料一点一点に付すだけでは、その資料がどのような意味を以て展示に配されているかを理解することが難しいとしている。これは、博物館教育において、説明札の重要性を指摘するとともに、説明札を付すことにより何を伝達したいのかという展示企画者の意図の介在をも重要視しているといえるのではないだろうか。つまり、僅かな文字情報である説明札が及ぼす影響は、樋口も指摘するように良くも悪くも大きいといえるのである。

さらに、説明札は、観覧者がその資料に対して博物館の展示資料であることを証明する一つの表現方法でもあり、展示資料に説明札を付すことによって、博物館資料としての価値づけを明確に周知する事ができるといえよう。ゆえに、単なるモノでなく、博物館教育上に必要な博物館資料として再解釈され、説明札によってその点が視覚化され、観覧者へのガイドとなっているのである。

次に、松下が紹介したアメリカの事例から、カタログに「解説」機能を託す点は、コールマンの論における美術作

品を観覧する際の別冊を用いる点と同様の発想であるといえる。つまり、棚橋の問題視する「特價札のやう」な説明札を避けるべく、別冊をみながらの観覧スタイルで展示が成立しているのである。

ここで注目すべき点は二点挙げられる。第一に、棚橋は「特價札のやう」な説明札を問題視し、松下は資料名称等の基本情報を記した説明札よりも若干ながら詳細に書かれた解説、すなわちミニ解説パネルに値するものを資料と並列して必要性を感じていることである。つまり、説明札は博物館教育的意義を保つために必要な文字情報であるが、観覧者にとって最低限の情報では物足りないと考えているのである。松下が挙げた戦後のアメリカの事例は、カタログがあつてこそ完成する展示である。現代において、カタログを購入しなければ展示意図を理解し得ない展示は、宣伝時においても魅力が半減し、何より観覧するために訪れてもらわなければ、どんなに力を入れた展示でも意味がない。説明札が目立たずに短文で観覧者の心に訴えかけることに始まり、そこから解説パネルやカタログ、人的解説への興味をひくための工夫が必要なのではないだろうか。まず展示資料に注目する時、まさに説明札（題箋）は展示の入口の重要な役割を担っているといえるのである。

第二に、日本の博物館が展示内の資料に付された説明札や解説パネルで展示意図を伝え、さらに詳しく知りたい人のために別冊である図録や解説シートを位置付けていることである。博物館展示という狭く限られた空間の中で、伝えられる事は僅かであり、全てを伝えようとし過ぎるあまり、情報過多になることもままみられる。しかし、図録や解説シートにより、千地が行ったような人それぞれに対応する方法が可能であるといえよう。すなわち、「解説」は本来、同じ空間の展示を観覧しながら、不特定多数の人々の知的好奇心に働きかけることのできるツールなのである。

説明札には、解説パネルほどの詳細な情報は記されていない。しかし、その博物館に帰属する資料としての価値づけに説明札が存在するといえる。つまり、何故その博物館にとって学術的価値があると判断して収集・保管している

かが、短文で周知されているのである。文字による解説を必要としない展示は大いにあると考えられる。ただ、観覧者によっては、下地となる最低限の情報を知らずに展示を観覧していることもままあり、単に資料や資料群から何が見えてくるかを窺い知らぬまま、展示を後にすることもある。本論で注目する民俗資料展示ならば、和室や障子、ヤカンを知らない子どもたちが、和室の再現展示で構造を理解はするが、それがどのくらい「むかし」のことで、どの道具と同じくらいの時期に広まったもので、いまでもよく使われているかが分かりにくい。現代の都市部で生活する子どもたちにとつての「むかし」の概念は、地方の現在の生活文化に馴染みのあるものである場合が多い。誤解を生む展示は、人との亀裂を生む結果にもなり得るのである。

さらに現代社会において、文字は横文字、LINEやメールといった手軽かつ簡便な文字の交換が日常である点から、文字による「解説」は短文かつキャッチーな視点の必要性を一層強くしている。スマートフォンに慣れた人々にとって、文字は読むものではない。短文を感じ取り、反射的に反応を示すのであり、長文は読まない。

解説パネルに記された長文の文字を読むことを良しとするのではなく、文字による「解説」が展示における一定の情報伝達となり、それが入口となり得るといえるのである。文字を読むのではなく、感じる現代において、文字を最後まで読んでもらう工夫をすることにより、単に貴重なもの・珍しいもの、自身にとって懐かしいものだけでない、展示企画者による展示意図の伝達が可能になるのではないだろうか。

3 小結

説明札は、単なるモノを博物館教育に用いる博物館資料としての価値づけの一つであるといえる。しかし、説明札をめぐる諸問題について、形式的な部分は発達したが、説明札の内容からその効果を検討する論の展開はあまり活発

とはいえない。説明札の本来的意義は、博物館資料としてそのモノがどのような意味を持つのか、この展示にどう作用するかを短文で伝えることである。また、その点を不特定多数の人々にどのようにして気づいてもらい、考えてもらえるかが問われているといえるのである。

また博物館展示において、物的解説の一部である説明札は博物館教育に必須であり、鑑賞でなく理解を深めるための役割を担っていた。理解とは、展示企画者の意図であり、その資料についての知識でもあるといえる。説明札は単なる札ではなく、博物館教育にとって民俗資料展示が教育的である点を位置づけるためにも不可欠な情報伝達のツールであるといえるのである。

そして、説明札や解説パネルにおける文字による「解説」は、短文かつ簡易な文章が飛び交う現代社会において、より工夫を凝らすことにより、大きな役割を果たすのではないかと考える。

二 民俗資料展示における「解説」

1 民俗資料展示の問題点

前章では文字による「解説」について、その意義を述べた。しかし民俗資料展示において、「解説」への理解は他分野よりも難しいといえる。主に、その理由は生活に身近な道具を扱うからである。そのモノを使用した経験者にとっては博物館資料でなく、自分も使用していた（あるいは似たものをみたことがある）道具に他ならない。ゆえに博物館資料として題箋や解説パネル等の「解説」を付し、丁寧に扱われていることに対して、違和感を覚える声も絶えない。つまり民俗資料展示においては、題箋（説明札）を付すことによる博物館教育的意義を示したとしても、それを

すり抜けて自身の経験に当てはめやすいため、文字による「解説」をより工夫しなければならないのである。

樋口が論じた歴史展示における文字による「解説」は、歴史展示ならではの資料そのものが文字情報の宝庫であるが故の論でもあるが、一方、民俗資料展示は資料そのものの文字情報はそれほど多いとはいえず、既視感のある資料が展示されていると、文字による「解説」に注目させるための工夫が必要となる。これは、解説パネルにおける図や表、絵などにもいえることであり、文字のみとは限らない。

民俗資料展示の問題点は、以下の三点が挙げられる。

第一に、展示の意図を読み取る事が困難な場合があることである。なぜなら、歴史のピンポイントに添えることが少ないからである。民俗資料は人々の生活を扱うため、地域や家庭の差も加味すると、一点の資料の使用期間はピンポイントで具体的には言えない。加えて、工業製品で全国的に流通しているモノを収集・保管・展示することに対しては、なぜそこまで行うのかという問いに対する解答を明確に伝えることは難しい。その結果、展示意図が理解されずに昔の道具が単に並べられているだけの場所を、人的解説頼りもしくは解説なしの、いわば美術鑑賞のように観覧するしかなくなってしまうのである。

先に挙げた棚橋の論の通り、美術作品展示の作品のみの鑑賞と同様のことを目的とするならば、それは歴史を理解する手助けにはならず、博物館教育ともいえず、個人の感想を引き出すためだけの展示になってしまうのである。それは、歴史分野、特に民俗資料展示にとっても同様なのである。したがって、二種の連携に左右されず、軸となる民俗資料展示における物的解説が存在すべきなのである。

第二に、民俗資料は雑多なものも多いことである。何かの部品、何かの一部もまた、民俗資料として収集されることがある。また、個人旅行で収集した民芸品が入る場合もあり、これを後世に残す意義が明確でないものも多々みら

れる。しかしこれらを再解釈し、雑多なものから民俗資料へと昇華させ、「解説」を用いて観覧者と展示を繋げることが肝要である。民俗資料が単にある世代に共通する思い出に留まらず、その思い出の裏の情報を引き出し、「解説」で提示することができれば、雑多なものからの気づきを促す、博物館教育においてあるべき姿であるといえるのである。

第三に、民俗資料展示に対する議論があまり活発とはいえないことである。民俗資料展示は、学校連携展示として固定化している博物館もみられ、自由が利かない場合もある。仮に博学連携展示としたならば、ものの移り変わりが重視されやすく、文字などの物的解説よりも、人的解説を主眼に置くことが多くなる。加えて、「ものの移り変わり」を理解するという目的を達成しやすいために、民俗資料展示への問題意識が薄くなる点もあるだろう。さらに、単発の事例紹介そのものから窺い知れる情報はあまり期待できず、中にはいように解釈されている事例もあり、実際の問題点は浮き彫りになりにくい点も指摘できる。ゆえに、まず民俗資料展示に関する議論を行う必要性について論じなければならぬのである。

2 民俗資料展示論にみる「解説」

この項では、民俗資料展示論の「解説」の特徴を捉えるため、論史の大きな流れを述べる。

民俗資料展示論を総体的にまとめたのは、昭和二十九年（一九五四）の宮本馨太郎の論である。⁽¹²⁾ 宮本の論では、民俗分野の展示を目的・機関・場所の三種に分類し、静的かつ平面的な展示を避けるべきとした。この論から、民俗資料展示論の確立に向けた動きがみられるといえる。

昭和四十年代には、神埼宣武や田辺悟、勝部正郊、潮田鉄雄、内田賢作などにより、次々と見解が発表され、活発な議論が展開された。まず、昭和四十五年の神埼の論では、分かりやすくかつ「何かを与える展示方法」の一つとし

て、体験展示により「その民具の使われた生活の場を再現してそれに誰もが参加できる方法」⁽¹³⁾の必要性を示している。同年に田辺は懐古趣味や過去への郷愁によるものではなく、「過去をふまえて現代を思考し、将来をどう方向づけるか」という歴史的な基盤に立脚しての展示」⁽¹⁴⁾の重要性を説き、事例として日本とヨーロッパの糸車の比較展示を挙げている。また同年、勝部は懐古性の強い展示と比較展示の違いに明確な区別が必要であるとし、「考えさせる説明」⁽¹⁵⁾をすべきであるとしている。昭和四十七年に潮田は、「『民具の調査研究の集約が展示になる』と云えよう……民具をただ生産や作業工程の順に並べて見せる、と云ったことではない」⁽¹⁶⁾とし、科学展示のあり方に触れている。昭和四十八年の内田の論では、無形民俗資料の中でも特に民俗芸能について、その本質を伝えるには衣裳や用具を保管しながら展示するだけでなく、上演や各種道具などの製作使用などの技術面の展示が重要である点を論じている。⁽¹⁷⁾

昭和五十年には、岩井宏實が『民具マンスリー』の民具講座のコーナーにおいて全四回の展示論を論じている。やはり宮本と同様、民俗資料展示論の基礎を確立する上で重要な役割を担ったといえる。岩井はの中で、「既成の研究成果を元に解説や教育的配慮を行うだけならば、ギャラリーや百貨店などの展示との違いがなくなり、結果、博物館の存在意義の消滅もあり得る」と、厳しい目でみつめている。また、民俗資料展示の命題でもある懐古性について、「いたずらに懐古趣味を誘うたり、過去への郷愁だけを植えつける結果に終る危険性をもつものである」⁽¹⁸⁾とし、懐古趣味に捉われない博物館展示ならではの展示の必要性を論じている。

岩井はさらに、露出された体験展示と民俗資料展示について、以下のような注意点を指摘している。⁽¹⁹⁾

ケース外で観覧者の手に触れられる展示だけは、あまりにも身近にありすぎるため、個々の点についてはよく理解できても、大きな流れの中で系統的に把握することを忘れがちにするし、親しみからより以上に懐古趣味だけを誘発するおそれも生じてくる。

岩井は、体験展示の効果を知りながらも、民俗資料に触れることで何が分かるかを問題視している。その後、宮本常一や武士田忠による民俗資料展示に表れる間違った解釈への指摘⁽²⁰⁾がなされている。また国立歴史民俗博物館や大塚和義らにより、資料そのものでなく、資料の背景にあるものへの注目の必要性が示されている⁽²¹⁾。

平成十三年には、鈴木通大により展示批評が取り上げられている。鈴木は展示批評の視点が人により異なり、必ずしも要点を指摘しているとはいえない批評も存在するとし、「同一の展示に対して複数の批評が寄せられるようにならないと真の意味での展示批評にならないのではないか⁽²²⁾」としている。この展示批評への指摘は次節で詳しく扱うが、民俗資料展示をよりよいものとするために批評しながらも、その不足を指摘したのである。

民俗資料展示論に大きな変化がみられたのは、平成二十年の岩崎竹彦⁽²³⁾の論以降である。岩崎の論をきっかけに、介護と民俗学の関わりが注目されるようになり、特に医療分野で行われている回想法という手法を援用することで、博福連携という言葉が表れ、博物館は勿論、民俗学にとっても社会的寄与に値すると謳われるようになったのである。

以上、大きな流れを概観したが、民俗資料展示論において四点の指摘ができればよい。

第一に、従来の専門的分類展示から、一般大衆向けの「わかりやすい展示」を目指す動きがみられることである。これは、物的解説の中でも静的な説明札ではなく、「解説」をより動のかつ立体的に表現する方向へと論が展開していたと捉えることができる。また、展示資料と説明札との二方向からの情報の時代から脱し、展示手法をダイナミックに変えることによる「解説」の意外性の演出を求めていったといえ、文字による「解説」ではなく、その資料を観覧した時に自然と感じ取ることのできる「解説」の必要性が重視されているとも考えられるのである。

その答えの一つが、第二に挙げる懐古性である。懐古性は、生活に身近な道具を扱う民俗資料にとって切り離すことのできない要素である。動のかつ立体的な展示を求める中で、説明札と資料の陳列による静的かつ平面的な展示か

ら漂うのは、専門分類的な難解さと同時に懐古性でもあるといえる。ここで挙げられる動的かつダイナミックな展示は、従来の系統的分類的展示といわれるような、題箋を付けて並べるスタイルではなく、資料を組み合わせたり、映像を駆使したりするなどの、内容や外観の立体的な展示を示していると考えられる。

展示意図が分かりにくく、しかも専門的な知識の伝達ならば、理解が難しく、観覧者自身の身の回りから展示を観覧するために懐古あるいは珍しいという印象しか感じ取れない。すなわち、民俗資料展示において、文字による「解説」である解説札は、よほど展示意図を明確にし、かつその伝達に解説札が必要不可欠な状態でなければ、懐古性に囚われやすいといえよう。

「解説」は、一方で懐古性に留まるべきではないという論も同時に表れている。「解説」の方法は説明札をはじめ多様であるが、動的かつ立体的な展示こそ分かりやすい、つまり展示意図を読み取りやすいという論調の中、その流れに伴う懐古性の助長の危惧と、展示に調査研究の成果を反映する重要性を説く論も活発である。言い換えれば、「解説」に専門性ないし調査研究の成果がみられなくなっていくことが「わかりやすい展示」の一解釈であったのである。動的かつ立体的な展示を推奨した結果、「わかりやすい展示」に近づいたが、それに伴い、民俗資料が持つ懐古性ないし擬似懐古性⁽²⁴⁾が表面化し、問題視されたといえる。

何を「解説」で明らかにし、伝えるのかという点は、田辺や勝部、岩井ほかが論じているように、文字による「解説」の裏の重要性がいえる。それゆえ、解説札にも表現の仕方によっては、文字の裏の解説に気づかせるヒントを伝えることも不可能ではない。しかし、重要性の指摘に留まり、肝心の事例を挙げての論は少ない。理想は掲げられているが、何を以て解消されているのかという判断基準もさることながら、その理想に限りなく届いたと万人が頷くような民俗資料展示は困難なのである。民俗資料展示論において、理想とされる展示は、千地が論じたような段階的な

理解度別の「解説」ではなく、自身の過去、現在、そして未来を考えさせるような、内容としての動的かつ立体的な「解説」を介在させているのである。

第三に、題箋や解説パネルなどの「解説」を取り除き、いわば美術作品展示の作品鑑賞のようにすることもある。ただし、「解説」の最小限の単位であり、博物館資料としての存在意義でもある説明札までも排除するということは、博物館教育に供するものではないという事と同義なのである。特に日本の博物館教育には、説明札が不可欠と認識されてきたため、説明札を取り除いた「わかりやすい展示」の影響は大きく、民俗資料展示とは何かという究極の問いを投げかけられていると考えてよい。文字による「解説」は、資料と観覧者を意図的に結ぶための最低限の情報でありながらも、これが過少過多になると、「わかりやすい展示」から乖離してしまうと考えられる。したがって、文字による「解説」を外すと、資料と観覧者を結ぶのは、観覧者の興味関心のみということになり、自発的ともいえるものの、資料を展示する意図はおろか資料そのものの正しい理解からまでも離れる危険性がある。これを民俗資料展示に置き換えて考えるならば、文字による「解説」は、民俗資料展示においてなくてはならないものといえるのではないだろうか。

第四に、民俗資料展示論では、展示批評について論ずる研究者は非常に少ない。また各論は、具体事例を挙げることも稀であり、加えて展示を批評するまでは進んでいない。しかし展示批評に注目する理由として、民俗資料展示を観覧した結果である点が挙げられる。つまり鈴木が論ずるように、本来的な展示批評は複数の視点から一つの展示を批評しなければならないが、研究者自身の経験から論じている民俗資料展示論として扱うならば、研究者視点からどのように民俗資料展示を捉えているのかという点が明らかにしなければならない。ただし、具体的になく、一般論を述べるに留まっている論もみられるのは否めない。大半の論文・報告などでは、従来の展示から一般大衆向けの「わ

かりやすい展示」への変化を主張すると同時に、懐古性が問題視され、比較などの調査研究を元に学術的意義の重要性の再認識が論じられている。そして、実物主義のみに凝り固まるのではなく、その資料を通じた民俗事象の展示の必要性が示され、その一大具現化が介護と民俗学、すなわち回想法の有効性という大きな流れになっていると考えられる。展示批評を深く分析することにより、文字による「解説」を具体事例から捉えることが可能であるが、展示批評そのものの確立が先という考えが強いといえよう。

研究者目線による展示批評は、「わかりやすい展示」の対極にあるものといえるだろう。なぜなら、研究者目線の専門的分類展示の批判から生まれた動的かつ立体的な「わかりやすい展示」だったからである。しかし民俗分野において、その本質をどのようにすれば伝えられるのかという視点は重視すべきであり、そのうえこれをどのように「わかりやすい展示」に仕上げるのかという議論が活発になることこそ、文字による「解説」を考えるために必要不可欠といえるのである。

3 小結

民俗資料展示において、静的かつ平面的、専門的分類展示の脱却が図られた。物的解説の中でも、特に文字による「解説」ではなく、参加型等の動的かつ立体的な「解説」が試みられ、それが「(展示意図が)わかりやすい展示」として推進されてきた。一方で、動的かつ立体的な「解説」は、民俗資料展示論で問題視され続けてきた懐古性の助長や、疑似懐古性の創出、つまり美術作品の鑑賞と変わらなくなる危険性があるとの論も活発化した。「解説」は、静的かつ平面的な点である点が悪いのではない。「解説」が意図している、観覧者に伝えるべきことや考えてもらいたいことを、しっかりと観覧者が受け取れるようにしなくてはならないのである。雑多で博物館資料としての認識が薄い民俗

資料に、博物館教育的な意義を付すために、文字による「解説」は必要なのである。

三 展示批評にみえる「解説」

1 展示批評の意義

これまで博物館展示としての「解説」、その中の民俗資料展示の「解説」に触れ、その意義及び問題点を指摘してきた。本稿で取り上げた物的解説の中でも、キャプションや解説パネルなどの文字を伴う静的かつ平面的な解説は、展示批評論の中でどのように位置づけられ、評されてきたのだろうか。

まず展示批評は、展示評価の一種とも考えられるが、同時に批評の一種である点も重要である。展示評価とは、展示前の企画段階から展示中・展示後に至るまでの総合的な評価を指す。展示評価の特徴は、解説パネルや照明などのハード面と、観覧者の理解度や行動などのソフト面を重視する点である。主な先行研究としては、平成五年（一九九三）の倉田公裕・矢島國雄による「博物館展示評価の基礎的研究」²⁵などが挙げられ、以後、一般観覧者の評価を軸とした研究が進められてきた。

歴史系の学術雑誌において、展示批評を継続的に続けているのは『地方史研究』と『民具研究』である。平成七年（一九九五）に『地方史研究』において、展示批評のコナーが設けられた。コナーの趣旨は、博物館展示や講座、学習会などの諸活動に対する紹介に留まらない、批評・提言の場をつくるというものであった。かかる動きは、博物館展示が一つの考えに凝り固まらず、外の批評及び提言に耳を傾け、共有しながら、よりよい活動を目指すべきとの考えが具現化したものと捉えることができる。

『地方史研究』における批評の特徴については、以下の四点が挙げられる。第一に歴史展示中心で紙資料の扱いに対する指摘も散見される点、第二に一人の評者が複数の展示を比較して批評している点、第三に同種のテーマならば高島屋などデパートや市民ギャラリー等の博物館展示とは別の多様な施設の展示を取り上げている点、第四に専門外の学術経験者も批評に加わっている点、そして第五に人的解説やパンフレット及び図録を参照しながらの批評の点である。

『地方史研究』における批評では、広く同一テーマを捉え、批評する「人物」と批評対象である「展示」が多彩であるものの、物的解説、特に展示内における文字による「解説」からの批評とは言えない。第一章で挙げた、松下が紹介したアメリカの事例のように、パンフレットや図録はその展示を批評する上での絶対条件と捉えられ、付随情報とは考えられていない。したがって、パンフレットや図録は読む前提で展示を批評しており、ただ単に展示を見ただけの観覧者の視点はあまり重視されていないのである。

一方、『民具研究』における批評の始まりは、『地方史研究』がコーナーを設けた翌年のことであった。つまり、両者の批評はほぼ同時期に始まり、今日に至っているのである。『民具研究』における批評の特徴について、以下の三点が挙げられる。第一に民俗資料展示のほか、考古・歴史・美術分野等との総合学術展示も視野に入れた事例を挙げている点、第二に展示手法や展示テーマの妥当性を重視する点、第三に同種の展示を扱う事例を複数の評者が持ち寄る形式をとっている点である。したがって、『民具研究』では図録ありきでなく、展示そのものを観覧し、批評しているといえる。ここで確認すべきは、両者の批評に対する視点が異なることで、そのうち『民具研究』は展示そのものを重視し、物的解説、中でも文字による「解説」を取り上げ、批評している点である。

以上に対して、展示批評研究は全く進んでいない。「批評」の意味は、良い点や悪い点を取り上げ、その物事の価値

を論じることである。類似の用語で「批判」があるが、これは、良い点は正当に評価するものの、悪い点は徹底的に指摘して検討を重ね、本来的意義を論じることであり、後者に力を入れる場合が多い。ともに他者からチェックされる点は共通しているため、展示批評は歓迎されにくいものかもしれない。

展示批評研究が進まない主な理由は、博物館施設では、一般来館者の視点での博物館展示が軸となっている点にあると思われる。博物館展示は、従来の専門的分類的展示からの脱却により、一般来館者にとって「わかりにくい展示」から「わかりやすい展示」へと意識が変化しただけのもの、内容の検討はあまりされてこなかった。ゆえに、特に民俗分野の展示では、脱却の反動により「何をわかりやすくするのか」という議論を経ないまま、今日に至っているのは繰り返し指摘されてきた。民俗資料展示における今日的な問題点を浮き彫りにし、改善するためにも、研究者による批評は一般来館者の評価と同様に、博物館展示評価には欠かすことのできないものである。博物館展示が学術情報を含んだ博物館展示であるためにも展示批評は必要不可欠なのであるが、これを題材とした研究は乏しい。しかし展示批評研究は、民俗分野の研究者が「解説」に何を求めているのかを把握するためにも、必要な研究と考える。

3 展示批評の問題点と利点

平成八年（一九九六）、山田尚彦によって『民具研究』における展示批評が始まった。山田は展示評価の難しさを冒頭で述べつつも、展示批評の必要性について、展示をより深め、博物館の存在意義を示すためであるとしており、註では、学芸担当者個人の業績評価との別を強調している。また、展示の評価方法として、以下のように述べている。²⁶⁾

展示図録その他からうかがうことのできる企画者の意図をまず確認して、次にその意図がどのように展示内容に反映されているかを観察し、展示を初めて観ることになる観覧者にその展示意図がどの程度伝わるかを判断

する。

山田は、博物館展示を多様な角度から分析し、ディスカッションすることに加え、入館者研究をも可能にするような「展示ジャーナリズム」分野の確立をも望んでいる。現に、山田の批評には参考文献二〇冊が用いられ、展示内容のほか、その博物館施設における過去の展示や対談履歴を辿った上での展示批評の見本が示されている。

翌九年には金子淳により、展示批評のあり方が論じられている。『地方史研究』において、展示批評のあり方に触れた批評は、現在まで金子のみである。金子は批評の方法論の未熟さに伴う展示批評の現状を、以下のように論じている。⁽²⁷⁾

実際には個人の主観に負うところが大きく、単なる感想や観覧記に終始したり、批評を試みるにしても、評者の個人的な関心に基づいて、展示における「視点の欠落」のみを指摘するにとどまるなど、本来的な意味での「批評」として地位を確立していないように思われる。

また、金子が展示批評に必要であるとした点は、展示の内容及び構造にとどまらず、より広く民俗資料展示の課題といってもよいものである。民俗資料展示論において、展示批評は一翼を担うものである。

平成十四年には、加藤隆志が『民具研究』において、展示批評の役割について論じている。加藤によると、展示批評の必要性が唱えられるとともに、利用者視点による博物館評価の実施の議論が高まったとし、以下のように続けている。⁽²⁸⁾

現代社会の中で、博物館の活動を通じて立ち上がる課題を学芸員はもとより市民や研究者とともに考えていくことが重要との認識が一層されるようになってきたのである。

要するに、展示批評の役割は、博物館を多くの人々で考えるための一方法と捉えられるのである。

また平成十五年には、岩野邦康が『民具研究』において、展示批評のあり方を以下のように論じている。⁽²⁹⁾

最も展示批評に適しているのは、何人かが、相互に会話を交わしながら観覧する形式なのではないかと思う。この形式ならば眼前の展示コーナー・展示物に対する批評を、展示に即して展開できる。そういった批評は、そのまま文章化すれば、とりとめのないものになる性質になるだろうが、逆に、はじめから文章にまとめようと企てられた展示批評は、展示物の配列とは異なる論理で構成されてしまうため、展示コーナー、展示物を見ながらの批評とは、かなり離れたものになってしまうようだ。

岩野は『民具研究』における展示批評コーナーに対し、批評を文字化する際の難しさを挙げている。

同年には畠山豊が、同じ『民具研究』において、「展示評の役割の一つに、展示担当者に見えなかったものを提示する⁽³⁰⁾」と述べており、展示批評が博物館内部のものではなく、外からの意見を取り入れることによる効果を期待している。

3 注目された「解説」

前節では展示批評の意義と問題点について確認したが、本節ではより具体的に論じていく。『民具研究』の「展示批評」コーナーは、平成八年の一二号から同三十年の一五七号までに七〇回を数える。つまりこれらの中には、複数の展示批評を載せている号もみられるのである。批評内容をまとめると、以下の四つの項目に分類することができる。

収集理念

展示意図（展示テーマ・項目の妥当性）

各種展示手法（象徴展示・比較展示・体験展示など）

展示解説

この中で一番少ない項目は、収集理念である。その理由として考えられるのは、民俗資料が収集理念の確立を待たずして収集されているという現実問題がある。民俗資料は、区画整理事業や世代交代等の理由により、一気に一〇〇点単位で受け入れる場合もあり、資料収集における取舍選択が間に合わない場合もある。また、一軒のまとまりの資料としての価値づけをされることもあり、現実の展示資料と収集された資料とではイコールとはいえず、その点では批評しにくいのかもしれない。

次いで、展示意図と各種展示手法が多い。これらは何を伝えたいのかということと、それを分かりやすくするための手法についての批評である。

右の四項目のうち、最も多い項目は物的解説としての「展示解説」である。民俗資料展示論、中でも展示批評において、「解説」への関心は非常に高い。批評された「解説」の内容は、表一に示した七つの要素に分けることができる。

表1から判明する重要な点は、次の三つである。第一に、展示意図を理解してもらうために必要不可欠な資料及び調査の不足である。この点は、展示企画者への基礎的作業の欠如に対する批判とも捉えることがで

No.	解説の指摘内容	不足内容の具体
1	資料不足	展示意図を伝えるための資料
2	調査不足	展示意図を伝えるための調査
3	解説不足	基本的事項に対する解説、再現展示への解説、映像展示への解説、資料的意義の解説
4	別視点の情報不足	展示企画者の考えにはみられない、同テーマを展示する上で必要と考えられる視点
5	分かりにくさ	漠然とした不足
6	必然性の欠如	展示における「解説」の必然性
7	図録の解説不足	展示にて示されている事柄についての図録上の不足

表1 『民具研究』の展示批評にみる「解説」の項目分類

きるが、何より展示意図の理解不足が、ひいては最終的に「わかりにくい展示」の元凶となっていることの指摘でもある。展示資料もまた「解説」のツールの一つであり、資料からしか読み取れない情報もある。言い換えれば、資料そのものが展示の中で「解説」を担うこともあり、必要な資料がなければ「解説」不足となってしまう場合もあるのである。この点が、分かりにくさや必然性の欠如に繋がっているといえる。

第二に、別視点の情報不足である。この点は多くみられるが、その要因は評者が自身の問題関心から評するためみられる傾向である。「あの部分も解説していたらよかったのに」という、加点式の指摘であるため、金子が述べたような、個人的な視点ではない。博物館にとっては確かに一助となり得る指摘ではあるが、必ずしも展示意図に沿った解説の不足を批評しているとは限らない。

第三に、図録の解説不足である。『地方史研究』における展示批評とは異なり、『民具研究』における展示批評では、図録は、観覧した展示をそのまま持ち帰るもので、かつ展示を写真や文字による「解説」で大幅に補う役割として認識されている。したがって、展示と異なる構成であったり、展示に対するプラス要素がなかったりした場合、解説不足と批評されている。つまり、『民具研究』における展示批評内の「解説」の捉え方としては、展示資料そのものの不足による「解説」不足のほか、何を伝えたいかという視点とともに、何が学術的に不足なのかという視点もまた持ち合わせているといえる。特に文字による「解説」を非常に重視している点は、留意すべきである。

次に、各事例についてまとめた表二から、「解説」の問題点を指摘した具体事例を挙げる。

事例番号3. 考古学の分野の展示であるが、遺物の名称及び素材、出土遺跡名はわかるものの、資料の性格や用途が一般来館者には分かりにくい。

事例番号10. 採集地の情報があれば、その背景が判明するため、寄贈者の大字・小字まで記載すべきだった。

95 民俗資料展示における「解説」とその意義

事例 番号	展示名	施設名	評者	展示種別	批評内容
1	動物とのつきあいー食用から愛玩までー	国立歴史民俗博物館	山田尚彦	企画展	1ケース内に複数の項目があるため、説明不足
2	農耕治の世界ー村のくらしと鉄器ー	安城志歴史博物館	川島一仁	企画展	・ 展示テーマ内の1項目が説明不足 ・ 複数の説のうち、一方を選んで理由の説明不足 ・ 展示テーマとの関係の説明不足 ・ 展示室内における資料説明不足。図録に頼った展示 ・ 儀礼に関する再現展示の説明不足
3	掘り出された都市ー江戸・長崎・アムステルダム・ロンドン・ニューヨークー	東京都江戸東京博物館	小川望	企画展	・ 現代的な生活用具の展示に対し解説類を排除した説明不足 ・ キャプション内容の不親切(遺物の性格や用途の説明不足)
4	滋賀県立琵琶湖博物館常設展	滋賀県立琵琶湖博物館	廣井裕之	常設展	・ スクリーンに映し出された祭りの映像の説明不足
5	災いくるな〜むらざいのねがい〜	千葉県立房総のむら	朝岡康二	企画展	・ 展示資料を邪魔しないように目立たない解説なので、図録による解説がちょうど良い
6	四万十川・漁の民俗誌ー	高知県立歴史民俗資料館	谷脇温子	企画展	・ 資料解説は短めであるが、図録は情報不足 ・ 資料の差異性を挙げた項で解説不足 ・ 「3何をとる道具かな」のコーナーにおいて、資料の全面に魚を主人公にした1コマ漫画(内、1枚は4コマ漫画)を用いる事で、魚の習性や特徴を理解できる ・ 話者の聞き書きを抜粋した解説により、長年の経験の積み重ねを話す話者と、実際に対面しているような効果がある
7	葉のちからー生薬の中で生きているー	遠野市立博物館	中田 切	特別展	・ フラ1本の部位および使用例をパネルで解説されている意義が大きい。使い分けの工夫が読み取れる
8	空の玄関・羽田空港70年	大田区立郷土博物館	横山恵美	特別展	・ 国高の旅客用飛行場に選ばれた理由の解説不足 ・ 予備知識のない観覧者にとっては理解しにくい
9	ねがひ、うらない、おまじないー欲望の造形ー	茨城県立歴史博物館	高橋典子	企画展	・ 後で図録を見て理解し、興味深く見えてくるため解説不足 ・ 解説が観覧者に語りかけるような軽妙な口調で書かれていた ・ キャプションは最小限で、資料解説が不十分
10	戦後松戸の生活革新ー新しい暮らし方へのあこがれー	松戸市立博物館	福岡直子	企画展	・ 全国的に流通してきた変化製品が展示されているが、その背景を知るために寄贈者の住所(大字、小字程度)を添えた方が良かった
11	大正昭和くらしの博物館 民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージゼアム	国立民族学博物館	加藤幸治	企画展	・ 壁面の解説パネルが遠く感じられ、読みづらかった ・ 道具自体が何に使用されているかという基礎的情報不足
12	唄いと占い	川崎市市民ミュージアム	梅野光興	企画展	・ 文字資料の内容についての解説不足
13	くらしを集めるくらしを探る 屋根裏の博物館 Attic Museumー実業家渋沢敬三が育てた民の学問ー	横浜市歴史博物館 神奈川大学日本常民文化研究所	岩野邦康	特別展	・ 観覧者に分かりやすいように、渋沢敬三を「敬三さん」と呼んで親近感を演出したり、文体を平易にしつつもポイントには外さない工夫
14	越後の人形道祖神・異形神の系譜ー	柏崎市立博物館	浜野達也	特別展	・ 各地域のサインカミ行事の全体像の解説不足
15	肥やしのチカラー肥やしのむかしと肥やしのみらいー	葛飾区郷土と天文の博物館	宮本八恵子	特別展	・ 博物館のトイレの個室においても「ぽっとん便所の神」についてのミニ解説パネルが配されていた
16	布の声をきく 布のさきやきがいつばい	福島県立博物館	島立理子	企画展	・ 並べられ、触れることができたが、観覧者には使用方法が分からない物が多かった ・ 裁縫の雛形は時代、地域、製作された学校などにより多様な存在が確認できるため、これに踏み込んだ解説があった方が良かった ・ 庄内地方の有能における衣類の存在を解説する事により、実用や美しさだけでなく、社会的役割をも解説している
17	大森まわら細工作品展ー輝け！私たちのまわら細工ー	大田区立郷土博物館	松井勲尚	企画展	・ 作品の用途、作品パネルと作品との関連性、子どもたちがまわらで何を表現しようとしたかの解説不足、教科・テーマの所在不明
18	船と船大工ー湊町新潟を支えた木造船ー	新潟市歴史博物館	内田幸彦	特別展	・ 展示資料が造船工程の全体に渡るのに対し、解説不足 ・ 船大工に特徴的な道具の解説不足 ・ 防水に用いるものの展示があったが、それらの併用や使い分けについての解説がみられない ・ 船材の転用の理由を示す解説が見当たらなかったが、ケース内展示の井戸枠に付された小さな説明ラベルの説明の重要視
19	甲賀前挽と木挽の仕事	甲南ふれあいの館	小松大介	企画展	・ 鑑の部位の専門用語が多く、少しわかりづらかった
20	竹・パンフスタイル	高知県立歴史民俗資料館	青山洋二	企画展	・ 竹の展示でありながら、竹そのものの種類、生態や竹のある景観、環境、竹の歴史などの解説不足 ・ 竹を扱う被差別民との関係についての解説不足
21	野洲麻ー道具がたかる麻づくりー	栃木県立博物館	浜野達也	企画展	・ キャプションのタイトル上部に、資料のポイントを的確に捉えた短文20文字程度のキャッチコピーの称賛(解説本文に誘導する効果が生じるかもしれない)
22	モノ売りー行商に出る人・行商を待つ人	柏崎市ふるさと人博物館	野堀正雄	企画展	・ 解説分のポイントの大ききの不十分
23	糸の世紀・織りの時代ー湖北・長浜をめぐる糸の文化史	長浜市長浜城歴史博物館	中藤容子	特別展	・ キャラクターであるおキヌちゃんの解説は子供向けとはいえず、内容は高度なものと呼賛
24	一生を生きるー人生儀礼の博物館	埼玉県立歴史と民俗の博物館	板橋孝夫	常設展	・ 人生儀礼の写真パネルについて、懐かしさでなく魔物との関係で解説すべき

表2 『民具研究』の展示批評にみられる「解説」内容

事例番号14・サイノカミ行事の全体像をもう少し説明して欲しかった。

事例番号16・裁縫の雛型においても、時代・地域・製作地を明確にする必要がある。

事例番号20・竹の展示では、竹そのものの種類や生態、竹のある景観、環境、竹の歴史などの展示が不十分だった。

これらに共通しているのは、「解説」の欠如から資料の背景が分からないという指摘である。例えば事例3、16は専門的分類的事項についての指摘でもあり、一方事例10は大字・小字という地域範囲の情報の欠如が指摘されている。ただし、事例10で大字・小字名が判明したとしても、その地域の住民が行ったことのある観覧者でなければ、字名の付加は観覧者の理解には結びつかない。事例14、20では行事をピンポイントで捉えたり、展示テーマに幅を持たせ過ぎたために、全国の事例を視野に入れた広い視野の「解説」が不足している点を指摘している。

また、「解説」にも誤解が生じる場合がある。これは、間違った解説による誤解という意味であり、博物館展示としては避けたい問題である。例えば、『民具研究』における展示批評の最初の号で、武蔵野美術大学資料図書館での企画展「くらしの造形7 かなもの」を批評した石野律子は、金属製品全般を扱う展示において、漁具の収集率の低さから解説不足が生じる危険性を指摘している。³¹ 展示の中で他の部分は充実しているものの、一部不足している場合には、欠けているという情報を「解説」して伝えなければ、来観者は展示状況が真実であると誤解してしまうのである。かかる誤解を解くためにもしっかり「解説」するべきなのである。

誤解という点でいえば、事例24で民俗的意義にも触れている。石野が批評したのは、大量の資料の中の一部の収集率の低さによる誤解であったが、事例24は子どもの儀礼を対象としており、産着や赤子の額に朱印を捺す動きに対し、ただ単に懐かしさや古臭い迷信でなく、民俗学としてその習俗の意味を展示すべきであったとする。つまり、文字に

よる「解説」は、展示企画者がどのように展示資料を捉えているのかという点が明確に表すツールであり、誤解を生まないよう、内容を補足する役割を担っているのである。

次に、「解説」について、よい事例とされているものを挙げる。

事例6. 聞き書きの抜粋や、漫画を用いた解説パネルの効果。

事例13、23. オリジナルキャラクターによる解説。

事例6、9. 語り口調による解説。

これらは、無形の声や動きそのものを表すのに際して、文字や絵による「解説」を用いることで理解度が増したという評価である。民俗資料展示論において、宮本常一ほかが論じていた「わかりやすい展示」の一つが、この「解説」という方法なのである。映像や音以外に、どのように物的解説を用いて人を引きつけるのかという点が課題となる。民俗資料展示における「解説」の批評及び議論がより活発になることにより、展示を観覧した際に単に懐古的ないし擬似懐古的感覚にひたるのではなく、その資料の背景等の専門的な情報を手がかりに、展示を通して総合的な視座から考えてもらうために、「解説」をもっと活用すべきなのではないかと考える。

四 小結

展示批評は「解説」を多くの視点から捉えており、民俗資料展示論における「解説」を再検討する上で、よい材料であるといえる。『民具研究』における展示批評を概観すると、「解説」に対する関心が非常に高い。「解説」は不足や過多により観覧者を惑わせ、誤解を生むこともある。専門の研究者から見ると「解説」の情報量が少ないと判断し、より多くの解説を求める場合がある。その反面、「解説」が理解しにくいという指摘もみられることから、平易で短い

文章が求められる一方、内容は充実させるという相反する命題が見受けられるのである。かかる状況の中で、文字による「解説」が注目され、批評されることにより、民俗資料展示のあり方が少しずつ議論されてきているのである。

おわりに

本稿では、説明札に始まる文字による「解説」の重要性を、時代を追って確認してきた。また民俗資料展示という、他分野にない不安定な要素を持つ中で、博物館教育として必要な「解説」が、『民具研究』において今日も議論の的になっていることも確認した。民俗資料展示における「解説」の意義は、コールマンや棚橋の論などからも分かるように、博物館教育として理解するためにこそなのである。民俗資料に博物館教育的な意義を見出すためにも、「解説」は不可欠といえるのである。

註

- (1) Lcallman『Manual for small museum』（昭和二年）。
- (2) 博物館説明札に関する諸問題』（『博物館研究』第二巻第五号、一頁、博物館事業促進會、昭和四年）。
- (3) （前掲註（2）論文、二頁）。
- (4) 棚橋源太郎「第三節 博物館の説明札観覧案内」（『博物館學綱要』、一八二頁、理想社、昭和二十五年）。
- (5) （前掲中（4）論文）。
- (6) 青木国夫・松下隆章ほか「座談会 博物館の解説」（『博物館研究』第十五巻第十号、四頁、博物館事業促進會、昭和十五年）。

- (7) 千地万造「博物館における文字による展示解説」〔博物館研究〕第十五卷第十号、十一頁、博物館事業促進會、昭和十五年。
- (8) (前掲註(7) 論文、十二頁)
- (9) 樋口政則「博物館展示と文字―文字展示論への試み―」〔國學院大學博物館學紀要〕第三十二輯、一一四頁、平成二〇年。
- (10) (前掲註(9) 論文、一一九頁)。
- (11) 民俗資料展示における再現展示には、再構成、雰囲気、課題の三点の要素がある。三代綾「『再現展示』に至る歴史およびその効果」〔國學院雜誌〕一一七号、平成二十八年。
- (12) 宮本馨太郎「民俗資料の保管と展示」〔民俗資料とはどんなものか、長野県教育委員会、昭和二十九年)。
- (13) 神崎宣武「民具の展示について―青梅の民具展の例から―」〔民具マンスリー〕三卷三号、一頁、日本常民文化研究所、昭和四十五年)。
- (14) 田辺悟「地方博物館の現状と問題点」〔民具マンスリー〕四卷第一号、五頁、日本常民文化研究所、昭和四十五年)。
- (15) 勝部正郊「民具の展示に思う」〔民具マンスリー〕四卷三号、一頁、日本常民文化研究所、昭和四十六年)。
- (16) 潮田鉄雄「民具整理の実務8展示」〔民具マンスリー〕四卷一〇号、七頁、日本常民文化研究所、昭和四十七年)。
- (17) 内田賢作「博物館における民俗資料展示について」〔日本民俗学〕八五号、三七頁、日本民俗学会、昭和四十八年)。
- (18) 岩井宏實「展示(一)」〔民具マンスリー〕八卷三号、一四頁、昭和五〇年)。
- (19) 岩井宏實「展示(三)」〔民具マンスリー〕八卷五号、一九頁、昭和五〇年)。
- (20) 宮本常一「付・博物館の展示に関連して」〔民具と生活―生活学論集〕、ドメス出版、昭和五十一年)。
- (21) 武士田忠「地域博物館の抱える諸問題」〔日本民俗学〕二〇〇号、二二七頁、日本民俗学会、平成六年)。
- (22) 岩井宏實ほか「民俗展示の構造化に関する総合的研究」(国立歴史民俗博物館民俗研究部、昭和六十三年)。
- (23) 鈴木通大「博物館における民俗学の可能性」〔日本民俗学〕二二七号、平成一三年)。
- (24) 実体験をしていないにも関わらず、イメージによって懐かしいと捉えることである。このイメージが民俗資料展示にお

ける誤解を生むのであり、そのためにも「解説」は重要と考える。

- (25) 倉田公裕・矢島國雄「博物館展示評価の基礎的研究」(『明治大学人文科学研究所紀要』三三卷、平成五年)。
- (26) 山田尚彦「国立歴史民俗博物館企画展示『動物のつきあい―食用から愛玩まで―』」(『民具研究』一二二号、一〇六頁、日本民具学会、平成八年)。
- (27) 金子淳「くにたち郷土文化館企画展『人生儀礼の諸相―誕生・結婚・葬送をめぐる人々―』」(『地方史研究』二六六(四七卷二号)、九四頁、地方史研究協議会、平成九年)。
- (28) 加藤隆志「町田市立博物館企画展『養蚕機織図』」(『民具研究』一二六号、七一頁、平成一四年)。
- (29) 岩野邦康「横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所特別展『暮らしを集める 暮らしを巡る 屋根裏の博物館 Attic Museum―実業家洪沢敬三が育てた民の学問―』」(『民具研究』一二七号、七七頁、日本民具学会、平成一五年)。
- (30) 畠山豊「新潟県立歴史博物館企画展『絵馬―生業絵馬尽(なりわいえまづくし)―』」(『民具研究』一二八号、九一頁、平成一五年)。
- (31) 石野律子「くらしの造形7 かなもの」(『民具研究』一二二号、一一六頁、平成八年)。

参考文献

- 小川望「掘り出された都市―江戸・長崎・アムステルダム・ロンドン・ニューヨーク」(『民具研究』第一一四号、平成九年)。
- 福岡直子「戦後松戸の生活革新―新しい暮らし方の憧れ」(『民具研究』第一二四号、平成一三年)。
- 浜野達也「越後の人形道祖神―異形神の系譜」(『民具研究』一三二号、平成一七年)。
- 島立理子「布の声をきく 布のささやきがいっぱい」(『民具研究』一三五号、平成一九年)。
- 青山淳二「竹―バンブースタイル」(『民具研究』一三七号、平成二〇年)。
- 石野律子「くらしの造形7 かなもの」(『民具研究』一二二号、平成八年)。
- 板橋春夫「生きる―人生儀礼―」(『民具研究』一四二号、平成二二年)。
- 谷脇温子「四万十川―漁の民俗―」(『民具研究』第一一七号、平成一〇年)。

中藤容子「糸の世紀・織りの時代―湖北・長浜をめぐる糸の文化史―」(『民具研究』第一四二号、平成三二年)。
高橋典子「ねがい・うらない・おまじない―欲望の造形―」(『民具研究』第一二三号、平成一三年)。